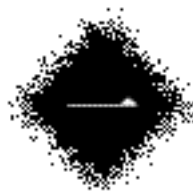




源氏物語五冊



紫式部 著
與謝野晶子 訳

A4用紙で印刷すると、実寸サイズをご確認いただけます。
※倍率100%の場合

桐壺きりつぼ

夕 <small>ゆう</small>	空 <small>う</small>	帚 <small>はき</small>	桐 <small>きり</small>
顔 <small>がお</small>	蝉 <small>せみ</small>	木 <small>ぎ</small>	壺 <small>つぼ</small>
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮
137	117	47	5

目次

紫のかがやく花と日の光思ひあはざる

ことわりもなし

(晶子)

どの天皇様の御代であつたか、女御とか更衣とかいわれる後宮がおおぜいた中に、最上の貴族出身ではないが深い御愛寵を得ている人があつた。最初から自分こそはという自信と、親兄弟の勢力に恃む所があつて宮中にはいった女御たちからは失敬な女としてねたまれた。その人と同等、もしくはそれより地位の低い更衣たちはまして嫉妬の焰を燃やさないわけもなかった。夜の御殿の宿直所から退る朝、続いてその人ばかりが召される夜、目に見耳に聞いて口惜しがらせた恨みのせいもあつたかからだが弱くなつて、心細くなつた更衣は多く実家へ下がつていがちということになると、いよいよ帝はこの人にばかり心をお引かれになるといふ御様子で、人が何と批評をしようともそれに御遠慮な

どというものがおできにならない。御聖徳を伝える歴史の上にも暗い影の一所残るようなことにもなりかねない状態になつた。高官たちも殿上役人たちも困つて、御覚醒になるのを期しながら、当分は見ぬ顔をしていたいという態度をとるほどの御寵愛ぶりであつた。唐の国でもこの種類の寵姫、楊家の女の出現によつて乱が醸されたなどと陰ではいわれる。今やこの女性が一天下の煩いだとされるに至つた。馬嵬の駅がいつ再現されるかもしれぬ。その人にとっては堪えがたいような苦しい雰囲気の中でも、ただ深い御愛情だけをたよりにして暮らしていた。父の大納言はもう故人であつた。母の未亡人が生まれのよい見識のある女で、わが娘を現代に勢力のある派手な家の娘たちにひけをとらせないよき保護者たりえた。それでも大官の後援者を持たぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをするようだつた。

前生の縁が深かつたか、またもないような美しい皇子までがこの人からお生まれになつた。寵姫を母とした御子を早く御覧になりたい思召しから、正規の

日数が立つとすぐに更衣母子おやこを宮中へお招きになった。小皇子しょうおうじはいかなる美なるものよりも美しいお顔をしておいでになった。帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生まれになって、重い外戚がいせきが背景になっていて、疑いもない未来の皇太子として世の人は尊敬をささげているが、第二の皇子の美貌びぼうにならぶことがおできにならぬため、それは皇家おうけの長子として大事にあそばされ、これは御自身の愛子あいしとして非常に大事がつておいでになった。更衣は初めから普通の朝廷の女官として奉仕するほどの軽い身分ではなかった。ただお愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女きじよと言ってよいほどのりっぱな女ではあったが、始終おそばへお置きになろうとして、殿上で音楽その他のお催し事をあそばす際には、だれよりもまず先にこの人を常の御殿へお呼びになり、またある時はお引き留めになって更衣が夜の御殿から朝の退出ができずそのまま昼も侍しているようなことになったりして、やや軽いふうにも見られたのが、皇子のお生まれになって以後目に立って重々しくお扱いになったから、東宮にもどうかす

ればこの皇子をお立てになるかもしれないと、第一の皇子の御生母の女御は疑いを持っていた。この人は帝の最もお若い時に入内じゅだいした最初の女御であった。この女御がする批難と恨み言だけは無関心にしておいでになれなかった。この女御へ済まないという気も十分に持つておいでになった。帝の深い愛を信じながらも、悪く言う者と、何かの欠点を捜し出そうとする者ばかりの宮中に、病身な、そして無力な家を背景としている心細い更衣は、愛されれば愛されるほど苦しみがふえるふうであった。

住んでいる御殿ごてんは御所の中の東北の隅すみのような桐壺きりつばであった。幾つかの女御や更衣たちの御殿の廊ろうを通い路みちにして帝がしばしばそこへおいでになり、宿直とくのいをする更衣が上がり下がりして行く桐壺であったから、始終ながめていねばならぬ御殿の住人たちの恨みが量かさんでいくのも道理と言わねばならない。召されることがあまり続くころは、打ち橋とか通い廊下のある戸口とかに意地の悪い仕掛けがされて、送り迎えをする女房たちの着物の裾すそが一度でいたんでしまう

ようなことがあつたりする。またある時はどうしてもそこを通らねばならぬ廊下の戸に錠がさされてあつたり、そこが通れねばこちらを行くはずの御殿の人どうしが言い合せて、桐壺の更衣の通り路をなくして辱しめるようなことなどもしばしばあつた。数え切れぬほどの苦しみを受けて、更衣が心をめいらせているのを御覧になると帝はいつそう憐れを多くお加えになつて、清涼殿に続いた後涼殿に住んでいた更衣をほかへお移しになつて桐壺の更衣へ休息室としてお与えになつた。移された人の恨みほどの後宮よりもまた深くなつた。

第二の皇子が三歳におなりになつた時に袴着の式が行なわれた。前にあつた第一の皇子のその式に劣らぬような派手な準備の費用が宮廷から支出された。それにつけても世間はいろいろに批評をしたが、成長されるこの皇子の美貌と聡明さが類のないものであつたから、だれも皇子を悪く思うことはできなかつた。有識者はこの天才的な美しい小皇子を見て、こんな人も人間世界に生まれてくるものかと皆驚いていた。その年の夏のことである。御息所——皇子女

の生母になつた更衣はこう呼ばれるのである——はちよつとした病氣になつて、実家へさがろうとしたが帝はお許しにならなかつた。どこかからだが悪いといふことはこの人の常のことになつていたから、帝はそれほどお驚きにならずに、「もうしばらく御所で養生をしてみたらにしようがよい」

と言つておいでになるうちにしだいに悪くなつて、そうなつてからほんの五六日のうちに病は重体になつた。母の未亡人は泣く泣くお暇を願つて帰宅させることにした。こんな場合にはまたどんな呪詛が行なわれるかもしれない、皇子にまで禍いを及ぼしてはとの心づかいから、皇子だけを宮中にとどめて、目だたぬように御息所だけが退出するのであつた。この上留めることは不可能である。帝は思召して、更衣が出かけて行くところを見送ることのできぬ御尊貴の御身の物足りなさを堪えがたく悲しんでおいでになつた。

はなやかな顔だちの美人が非常に痩せてしまつて、心の中には帝とお別れして行く無限の悲しみがあつたが口へは何も出して言うことのできないのがこの

人の性質である。あるかないかに弱っているのを御覧になると帝は過去も未来も真暗まっくらになった気があそばすのであった。泣く泣くいろいろな頼もしい将来の約束をあそばされても更衣はお返辞もできないのである。目つきもよほどたるそう、平生からなよなよとした人がいつそう弱々しいふうになって寝ているのであったから、これはどうなることであろうという不安が大御心おおみこころを襲うた。更衣が宮中から輦車れんしゃで出てよい御許可せんじの宣旨を役人へお下しになったりあそばされても、また病室へお帰りになると今行くということをお許しにならない。

「死の旅にも同時に出るのがわれわれ二人であるとあなたも約束したのだから、私を置いて家うちへ行つてしまうことはできないはずだ」

と、帝がお言いになると、そのお心持ちのよくわかる女も、非常に悲しそうにお顔を見て、

「限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

死がそれほど私に迫つて来ておりませんのでしたら」

これだけのことを息も絶え絶えに言つて、なお帝にお言いたいことがありそうであるが、まったく気力はなくなつてしまった。死ぬのであったらこのまま自分のそばで死なせたいと帝は思召おぼしめしたが、今日から始めるはずの祈祷きとうも高僧たちが承つていて、それもぜひ今夜から始めねばなりませんというようなことも申し上げて方々から更衣の退出を促すので、別れがたく思召しながらお帰しになった。

帝はお胸が悲しみでいっぱいになつてお眠りになることが困難であった。帰った更衣の家へお出しになる尋ねの使いはすぐ帰つて来るはずであるが、それすら返辞を聞くことが待ち遠しいであろうと仰せられた帝であるのに、お使いは、

「夜半過ぎにお卒去かくれになりました」